

「ラジオ」の某ちゃん

NHKが企画制作し3月と6月に放送されたドラマ「ラジオ」のストーリーは震災の翌年の1月から始まる。父母と仮設住宅で暮す主人公は高校2年生の女の子。中学時代の友だちがつけたあだ名「某ちゃん」で呼ばれている。1年経っても震災のショックから立ち直ることが出来ず、一人仮設にとじ込み、大音響でロックを聴いている。某ちゃんは誘われて地域の臨時災害放送局「女川さいがいFM」の高校生スタッフになる。初日、マイクロフォンを向けられたが声が出なかった。家に帰ると父から意外な言葉が。「よかったよ。黙ることも言葉だ。」「書いてみたらどうだべ？作文、上手だった」と。

「本当に受け入れて欲しかったモノは」

このドラマは、某ちゃんのブログでのツブヤキを軸に展開する。高校生らしくしなやかな感覚の表現は被災地の人々の気持ちを代弁するものでもあり、胸をうつ。「瓦礫は穢れ」の声に向かって某ちゃんがブログに書いた。

父のお下がりです貰った大切な青いドラムはドラムと呼べる形ではなかった。漁師の祖父が建てた立派な我が家は今じゃ更地。祖母の嫁入りの際に持って来た着物は海で若布のように漂う。若かりし頃の母の写真から海の匂い。全部ガレキって言うんだって。

(略)

!!ガレキと暮らす私達。好きで流されたんじゃないのに。目から流れた涙は懐かしい海の味。こんな悲しいモノを見るくらいなら、受け入れなんて最初から言わないで。そんな簡単な問題じゃないだろと、ガレキの山が私を見下ろす。ガレキの「受け入れ」「受け入れる」のはガレキだけじゃないんだとふと思う。私が本当に受け入れて欲しかったモノはガレキじゃなかったのかもしれないとふと思う。少なくとも受け入れて欲しかったそのモノには放射能なんて付いていない、心の奥にある清らかな優しいモ

「某」の名づけ親は 流されて
思い出となった。

だから某の
意味は
わからない
ままだ。



ノのはずだった。そんな事を考えながら、絆の文字が浮かんで泡のようにハジけた。

直後、ブログに200万の「名無し」批判が書きこまれ、某ちゃんのブログは炎上した。

人殺し/放射能をまき散らす悪魔の子/

お前んち特定しました/子供を殺す気か/
お前人の人生奪ってまで行きたい？

が、落ち込む彼女を支えたのもまた彼女のブログの読者やリスナーだった。某ちゃんはマイクを通して自分の決意を語る。

心の足

あの日、建物をぶかぶかと押し上げながら街を飲みこんで行く黒く大きな怪物を目撃し、私は気を失ってしまいました。私は自分の足で立とうとする気力さえ失いました。身体の足も心の足も動かないまま、長い長い1分1秒を避難所の体育館の時計が残酷に刻みました。このままじゃあもう私は2度と立つことができなくなる、と頭にふとよぎったのです。身体に生えた足で立つことができても、心の足はまだ寝たまま。ここで立たなかったら震災を言い訳に一生、自分の足で立ち上がろうとしないだろう。泥まみれだって血まみれだっていいじゃない！鼻血を垂らしながら自分の足で這い上がってきた自分があながち嫌いじゃありません。私は私の道を私の2本足で歩いて行きます。答え合わせは死ぬ前でいいんじゃないですか。今はまだ走り続けます。本当に欲しい物は自分の足で近づいて自分の両腕で掴んでみせます。

見終えて、某ちゃんの言葉の訴える力に圧倒された。反対に巷では立派な肩書と名前を持った大人が空虚な言葉を並べ立てている。どこにでもいる某ちゃんたちに期待する。某ちゃんは今春、東京の大学に進学した。